

*太陽観測衛星「ようこう」記念テレホンカード収蔵

今回も平成24年3月に天文台を去った山下芳子女史から譲られた記念テレホンカードである。太陽観測衛星「ようこう」は第14号科学衛星 SOLAR-A として国立天文台、宇宙科学研究所を主体に開発され、打ち上げ成功で「ようこう」と名付けられた X 線観測を主力とした天文観測衛星である。この衛星を記念して発行されたテレホンカード(写真1)を収蔵した。デザインも X 線で撮影された太陽面が採用されている。



写真1 「ようこう」打ち上げを記念したテレホンカード

打ち上げは、1991年8月30日、鹿児島県内之浦町(現在は肝付町内之浦)にある鹿児島宇宙空間観測所(現内之浦宇宙空間観測所)から M-3SII ロケットによって打ち上げられた。打ち上げ後、太陽の光を意味する「陽光」から「ようこう」と名付けられた。この衛星は、仕様寿命は3年であったが、本来の衛星設計寿命よりも長く稼働し、2001年12月15日に姿勢制御を失って観測が中断されるまでの約10年間、太陽活動のほぼ1周期に渡って観測を行った。

日本の人工衛星による太陽観測の歴史は長く、「たんせい」、「ひのとり」、「ようこう」と続き、現在は2006年に打ち上げられた「ひので」が活躍中である。

「ようこう」の観測装置としては次の4つが搭載されていた。

- 1) 軟 X 線望遠鏡 : SXT
- 2) 硬 X 線望遠鏡 : HXT
- 3) ブラッグ結晶分光器 : BCS
- 4) 広帯域スペクトル計 : WBS

「ようこう」に搭載された軟 X 線望遠鏡による太陽面画像が写真2であり、太陽磁場に

よるプラズマが白い模様として見えている素晴らしい映像である。

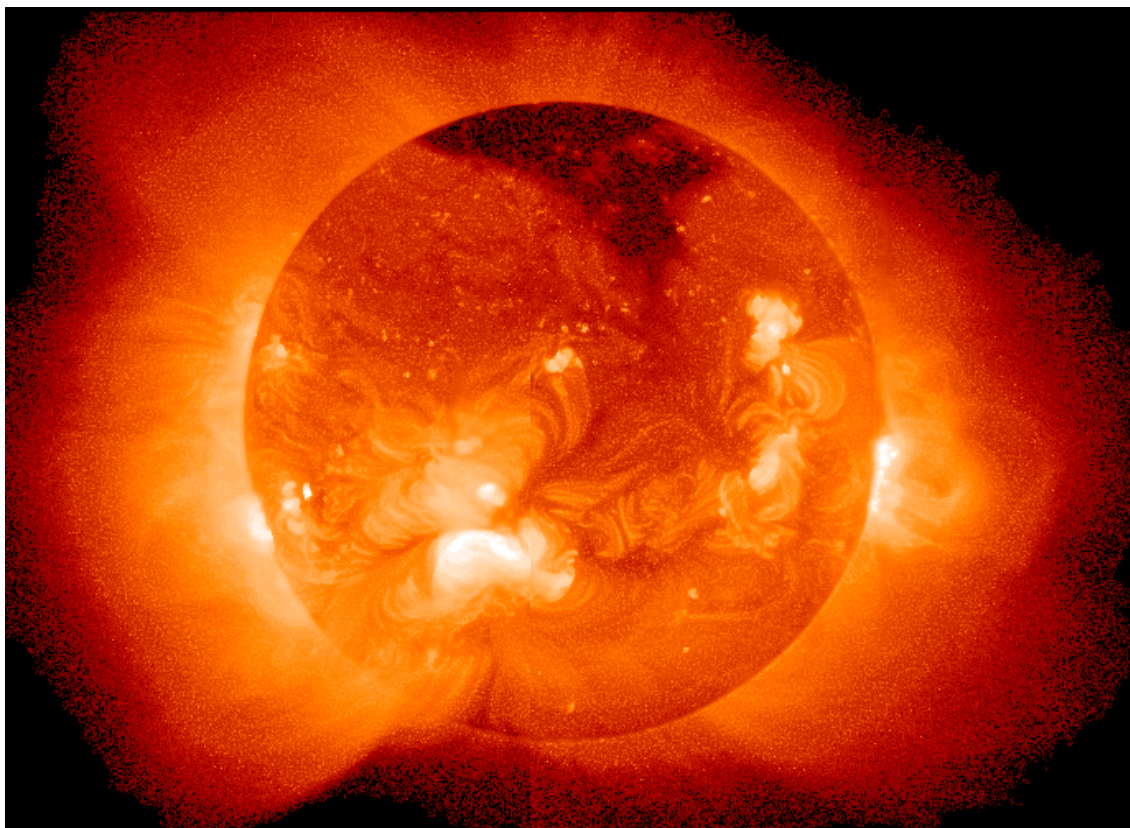


写真2 「ようこう」の軟X線望遠鏡：SXTで撮影された太陽面

筆者は、「ひのとり」打ち上げ後、その運用のため、ロケット、人工衛星を使った観測グループに移り、内之浦に通う人生を送っていたが、ハワイに建設した「すばる」計画が始まる頃には光赤外グループに戻っていた。「すばる」が完成し観測が始まったのを見届け、「ようこう」の次の計画であった「Solar-B」プロジェクトにハワイから呼び戻され、定年を挟んで開発グループで働かせてもらい、2006年9月打ち上げ成功で、現在の天文情報センターに移った。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp